



日中接触場面と日本語母語場面における話題導入プロセスに関する考察 : 初対面からの継続会話の分析

趙, 鵬群

(Citation)

国際文化学, 36:116-125

(Issue Date)

2023-03-20

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100479399>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100479399>



日中接触場面と日本語母語場面における

話題導入プロセスに関する考察

—初対面からの継続会話の分析—

Topic Initiation Process in Japanese Conversation

in Japanese-Chinese Contact Situations

and Native Situations:

An Analysis of First-encounter and Subsequent

Conversations

趙 鵬群

ZHAO Pengqun

概要

本研究は、日中接触場面と日本語母語場面における話題導入プロセスに違いがあるかどうかを探るため、日本語母語話者 4 名、中国人上級日本語学習者 2 名を対象に、両場面の日本語会話における初対面から 4 回目までの自由会話をデータに用いて、接触回数の増加による話題導入プロセスの変化と両場面の比較について分析を行った。分析の結果、話題導入発話に関して、初対面会話においては、主に相手に質問することで関係構築のきっかけを作るのに対して、4 回目の会話では、自ら自己開示を行いながら関係構築していく様子が両場面に共通して見られた。また、話題導入プロセスのパターンに関して、日中接触場面に見られる話題導入プロセスのパターンは日本語母語場面より多様であり、話題導入発話から話題確立まで様々な交渉を経ている。また、日中接触場面では、接触回数にかかわらず、相手に配慮しながら相互に話題を構築する「相互型」の割合は比較的低かった。一方、日本語母語場面では、話題導入プロセスのパターンに偏りが見られ、接触回数にかかわらず「相互型」の割合が顕著に高かった。

キーワード

話題管理、継続会話、会話分析、中国人日本語学習者、日本語母語話者

I はじめに

日常生活において、会話がスムーズに続くように、私たちは常に話の内容を変え、様々な話題を導入する。しかし、異文化間コミュニケーションにおいては、文化による異なる話題導入の方法が人間関係を損ねる要因になりうる。例えば、楊（2005, 2011）は、異文化間コミュニケーションが行われる際に、日本語と中国語における話題転換表現の相違がお互いに違和感を抱かせ、困惑する一因となっていると指摘する。ただし、この種類の研究は初対面会話を対象とするものが多く、その後の継続的な接触における話題導入の方法の変化についての研究が不足している。現実の人間関係は連続的に発展するものであるため、接触回数が増えるにつれ、話題導入の方法に変化が生じる可能性があると考えられる。そのため、初対面以降に継続的に行なわれる 2 回目以降の会話（本研究では「継続会話」と呼ぶ）をデータとして話題導入の方法を検討する必要がある。

そこで、本研究では、中国語を母語とする日本語学習者（以下、CJ）と日本語母語話者（以下、J）による継続会話データを分析する。日本語母語話者同士による日本語の会話（以下、日本語母語場面）との比較から、CJ と J による日本語の会話（以下、日中接触場面）における話題導入プロセスの特徴について明らかにすることを目的とする。

II 先行研究

2.1 初対面会話における話題導入に関する先行研究の概要

日本語の初対面会話における話題導入に関する先行研究では、話題導入発話に着目したものが多く（宇佐美・嶺田, 1995 ; 宇佐美・野口・木村, 2014 など）、話題導入発話から話題確立までのプロセスを考察する研究は数少ない。その例として、楊（2011）と大谷（2019）が挙げられる。

楊（2011）は中国語母語話者同士の会話と日本語母語話者同士の会話を用いて、話題導入プロセスを分析している。その結果、即時的開始、漸次的開始：a) 質問一応答連続型、b) 相互型、c) 確認連鎖挿入型という四つのパターンを抽出している。また、中国語母語話者同士の会話においては、即時的に話題を開始するのが基本的なパターンであるのに対して、日本語母語話者同士の会話においては、中国語母語話者同士の会話に比べ、「相互型」が占める割合が顕著に高い傾向が見られた。

大谷（2019）は、楊（2011）を「話題化までの具体的かつ多様な相互行為の実態の記述は行われていない」（p. 5）と批判し、初対面の日本語母語話者同士の 3 人会話を対象として、話題導入のプロセスを分析した。その結果、候補となる話題が導入された後に、相手がその話題を承認したり拒否したりしながら話題を交渉されていく様子を①即座の話題化、②段階的話題導入：傍参与者による話題化、共話による話題化、重複発話、繰り返しのあいづちによる話題化、質問による話題化、③候補話題の再導入による話題化、④否定的反応による候補話題の却下、などに分類している。

これらの研究において、初対面会話における話題導入プロセスの特徴について詳しく考

察されてきたが、2 回目以降の会話においての話題導入がどのように行われていくかについては明らかにされていない。

2.2 継続会話における話題導入に関する先行研究の概要

日本語の継続会話における話題導入に関する先行研究としては、呉（2017）、方（2020）が挙げられる。呉（2017）は初対面から 3 回の会話を通して、日本語母語話者と韓国人日本語学習者の日韓接触場面、韓国語母語場面、日本語母語場面の三つの場面における話題導入の提示方法の変化を分析した。そして、話題導入発話の提示方法を自己開示と質問の 2 つに分けた結果、韓国人日本語学習者が質問で話題を導入する回数は 3 回目の会話に急激に減っていた。一方、日本語母語話者の会話においては、会話の回数を重ねることによって、質問で話題を導入する回数が急激に減ることはなく、徐々に減って行くことがわかった。

方（2020）は日本語母語話者同士の初対面から 4 回にわたっての会話を分析対象とした研究である。会話ごとの話題の内容の変化を観察した結果、初対面会話では、客観的な情報交換が中心であるのに対して、2 回目以降の会話では、話題になる事柄に対する会話参加者の感情、意見、評価などが提示され、共感的に会話を展開させる傾向が見られた。

これまでの研究では、初対面からの継続会話を通して、会話ごとの話題の内容の変化や話題導入発話の提示方法が明らかにされているが、話題導入発話が提示されてから話題が話題化されるまでの交渉プロセスが会話ごとにどのように変化するかに関しての分析は見当たらない。

2.3 本研究の研究課題

以上をふまえ、本研究では、以下の研究課題を設ける。

研究課題 1：日中接触場面と日本語母語場面の区別による話題導入プロセスのパターンのバリエーションを明らかにする。

研究課題 2：接触回数の増加による日中接触場面と日本語母語場面における話題導入プロセスのパターンの変化を明らかにする。

III 研究の枠組み

3.1 会話の参加者

本研究では、中国語を母語とする上級日本語学習者（CJ）と日本語母語話者（J）による日中接触場面、日本語母語話者同士による日本語母語場面で採集したそれぞれ 2 組の自然会話データを分析資料とする。会話の参加者はすべて 21～23 歳（大学 4 年生）の女性である。同じ大学に所属するが、参加開始時に互いに面識がないことを確認した。また、日中接触場面と日本語母語場面での差を見るために、2 名の日本語母語話者（J1、J2）は日中接触場面、日本語母語場面の両方に参加するように組み合わせた。会話の参加者の内訳を表 1 に示す。

表 1 調査協力者の属性と組み合わせ

グループ 1	日中接触場面	J1	CJ1
	日本語母語場面	J1	J3
グループ 2	日中接触場面	J2	CJ2
	日本語母語場面	J2	J4

3.2 データの収集

本研究では、Zoom を用いて、初対面から同じ人との 4 回にわたる継続会話を録音、録画した。収録期間は 2021 年 6 月から 7 月と 9 月から 10 月の合計 2 ヶ月間で、週 1 回（20 分/回）の頻度で計 4 回の会話を採集した。収録の際は、今後も付き合いがあることを前提に、できるだけ普段通りに、自由に話すように指示した。会話データはすべて文字化し、分析資料とした。

3.3 分析方法

3.3.1 話題の区分

本研究では、三牧（1999）を参考に、話題を「会話参加者の相互行為により会話の中で導入、展開された内容的に結束性を有する情報のまとまり」とする。話題の区分は、三牧（1999）の話題の定義に従い、原則として話題の内容面に着目して行った。

話題の区分作業は、日本語母語話者 1 名の協力を得て、一致率を求めた。全体の 3 割の分析資料を筆者と協力者がそれぞれ区分し、一致率を求めた結果、一致率は 92%であった。一致しなかった箇所については、協力者と協議した上で決定した。残りの話題の区分は筆者が行った。認定した話題の数の内訳を表 2 に示す。

表 2 話題の数の内訳

	初対面	2 回目	3 回目	4 回目
J1/CJ1	15	8	8	7
J1/J3	10	5	9	9
J2/CJ2	10	6	9	7
J2/J4	9	9	6	9

3.3.2 話題導入プロセスの認定と分類

話題確立発話の認定については、楊（2011）と大谷（2019）を参考に、最初的话题導入発話がみられた後、相手参加者がその事柄について、「具体的に語る」、「関心を示す肯定的返事をする」または「導入発話者に関連した質問」の発話を行った場合に話題確立発話とする。話題の導入部は、当該話題区分の最初の発話から、話題確立発話までとする。なお、話題導入プロセスの分類も楊（2011）と大谷（2019）を参考にした。

IV 結果と考察

4.1 日中接触場面と日本語母語場面における話題導入プロセスのパターン

本節では、話題がどのようなプロセスを経て導入されるのかについて考察する。話題導入プロセスの分類とその定義は、楊（2011）と大谷（2019）を参考し、一部変更した。本研究の会話データに見られる話題導入プロセスのパターンをまとめた結果を表 3 に示す。

表 3 本研究のデータに見られる話題導入プロセスのパターン

	情報要求による話題導入プロセス	情報提供による話題導入プロセス
A) 即座の話題導入	<u>a. 詳しい応答による話題化</u> ：情報要求の話題導入発話の後に詳しい情報提供の話題確立発話が見られ、1 回のやり取りで話題がすぐに確立される。	<u>b. あいづちの繰り返しによる話題化</u> ：情報提供の話題導入発話の後に強い関心を示す繰り返しのあいづちの発話が見られ、1 回のやり取りで話題がすぐに確立される。 <u>c. 関連質問による話題化</u> ：情報提供の話題導入発話の後に強い関心を示す関連質問の発話が見られ、1 回のやり取りで話題がすぐに確立される。
B) 段階的 話題導入	<u>a. 連続質問を経ての返答による話題化</u> ：話題導入発話から話題確立発話までの話題導入のプロセスに「質問－応答」の連鎖が連続して見られる。 <u>b. 確認連鎖挿入後の話題化</u> ：話題導入がなされた後、導入発話の意味や意図が理解されず聞き返しが起こったため、話題が確立されるまでに確認のための発話連鎖が見られる。 <u>c. 相互型</u> ：情報要求の話題導入発話から話題が確立されるまでに、双方の参加者が相手の反応をみながら相互に情報を出し合うやりとりが見られる。 <u>d. 混合型（確認連鎖＋連続質問）</u> ：話題が確立されるまでに、確認連鎖と連続「質問－応答」の連鎖が見られる。	<u>e. 相互型</u> ：情報提供の話題導入発話から話題が確立されるまでに、双方の参加者が相手の反応をみながら相互に情報を出し合うやりとりが見られる。

C) 候補 話題 の 却 下	候補話題の話題導入発話が発話された後に、相手からの否定的反応によって候補話題が却下される。	
D) 一 方 通 行 の 会 話	候補話題の話題導入発話が発話される後に、相手からの承認が無いまま話題を進める。	

話題導入発話のタイプを「情報要求発話」と「情報提供発話」に分けて分析した結果、日中接触場面と日本語母語場面の両場面では、合計 10 のパターンが認められた。そのうち、「B) d. 段階的課題導入：混合型（確認連鎖＋連続質問）」、「C) 候補話題の却下」、「D) 一方通行の会話」の三つのパターンは日中接触場面にもみ見られた。

4.2 接触回数の増加による話題導入発話と話題導入プロセスの変化

本節では、本研究のサンプルの中で、接触回数が増えるにつれて、日中接触場面と日本語母語場面における話題導入プロセスがどのように変化するかについて分析する。

4.2.1 話題導入発話の変化

まず、グループ 1 とグループ 2 の初対面から 4 回目までの各会話において、「情報要求」と「情報提供」のどちらのタイプの発話によって話題が導入されたかをまとめたものが図 1～図 4 である。

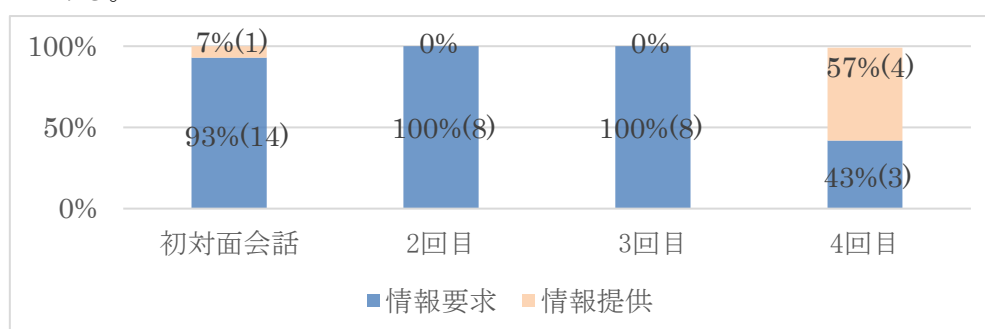


図 1 日中接触場面の話題導入発話のタイプの割合<グループ 1>

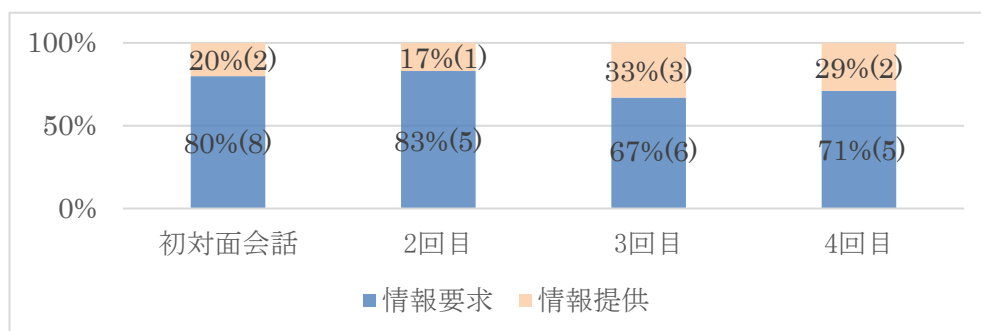


図 2 日中接触場面の話題導入発話のタイプの割合<グループ 2>

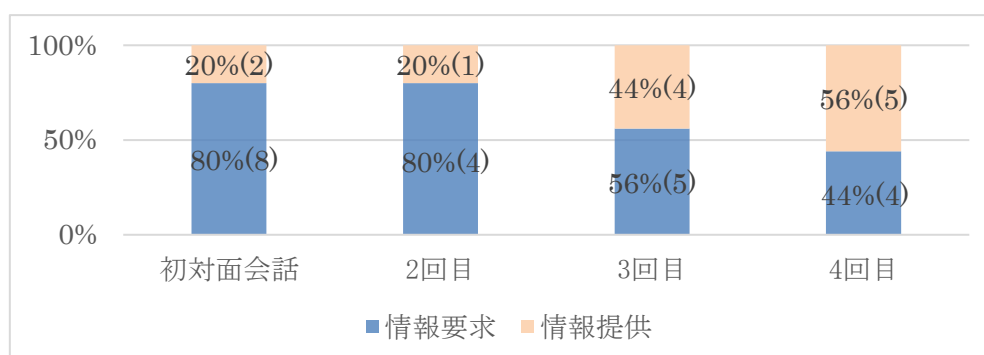


図 3 日本語母語場面の話題導入発話のタイプの割合<グループ 1>

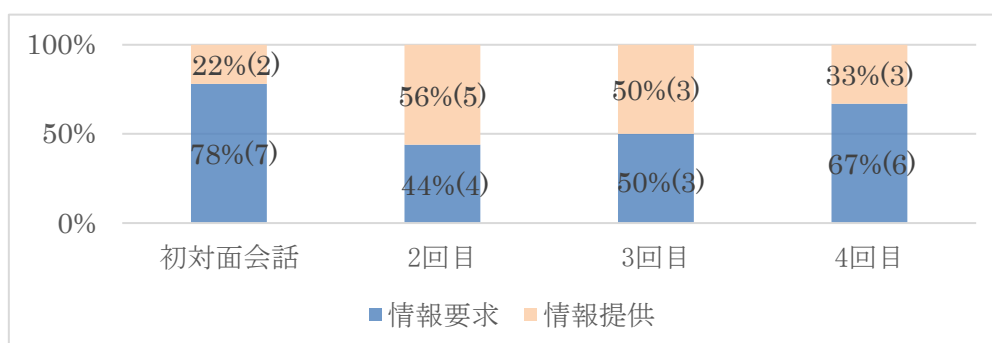


図 4 日本語母語場面の話題導入発話のタイプの割合<グループ 2>

両場面の話題導入発話に関して、初対面や 2 回目の会話においては、情報要求による話題の導入が顕著に多い傾向があるのに対して、4 回目の会話においては、情報提供による話題の導入の割合が増加する傾向があるという点で共通している。初対面や 2 回目の会話においては、主に相手に質問することで関係構築のきっかけを作るのに対して、4 回目の会話では、自ら自己開示を行いながら関係構築していく様子が見えてくる。

両場面の相違点について、まず、グループ 1 の図 1 と図 3 を比較すると、J1・CJ1 の会話では、4 回目の接触から、情報提供による話題の導入の割合が大幅に増加しているのに対して、J1・J3 の会話では、3 回目の接触から、情報提供による話題導入の割合が大幅に増加している。ここから、日中接触場面よりも、日本語母語場面の方が早い段階で自己開示を行うことが示唆される。

次に、グループ2の図2と図4を比較すると、J2・CJ2とJ2・J4の初対面会話においては、情報要求による話題の導入がともに顕著に多いが、2回目以降の会話では、情報提供による話題導入の割合は、J2・J4の会話の方が明らかに高くなるのに対して、J2・CJ2の会話では顕著な変化が見られない。換言すれば、日中接触場面よりも日本語母語場面において多く自己開示が行われた。

4.2.2 話題導入プロセスの変化

次に、グループ1とグループ2の初対面から4回目までの各会話における話題導入プロセスの割合を図5～図8に示す。

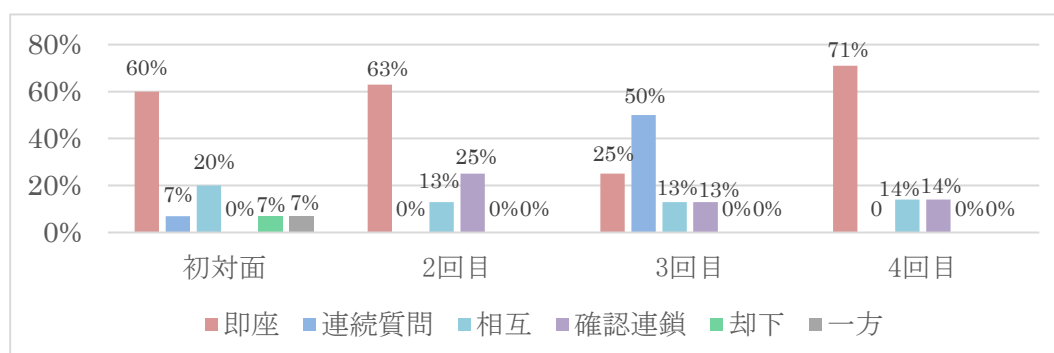


図5 日中接触場面の話題導入プロセス<グループ1>

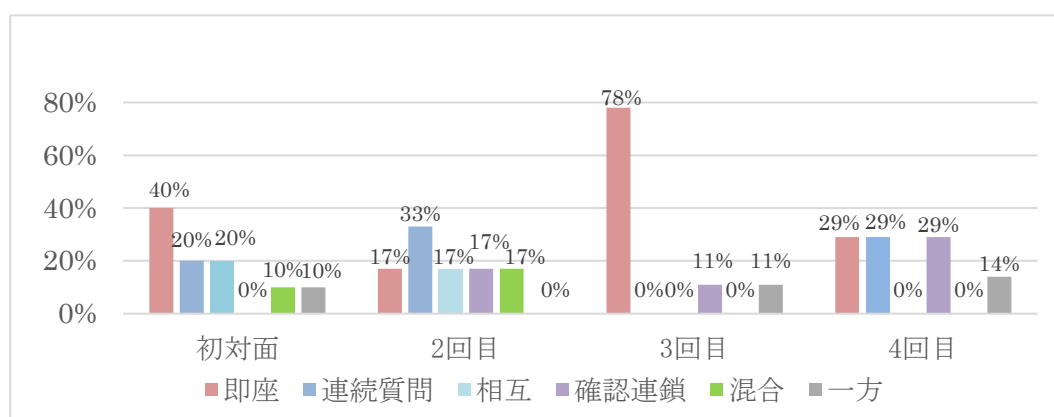


図6 日中接触場面の話題導入プロセス（グループ2）

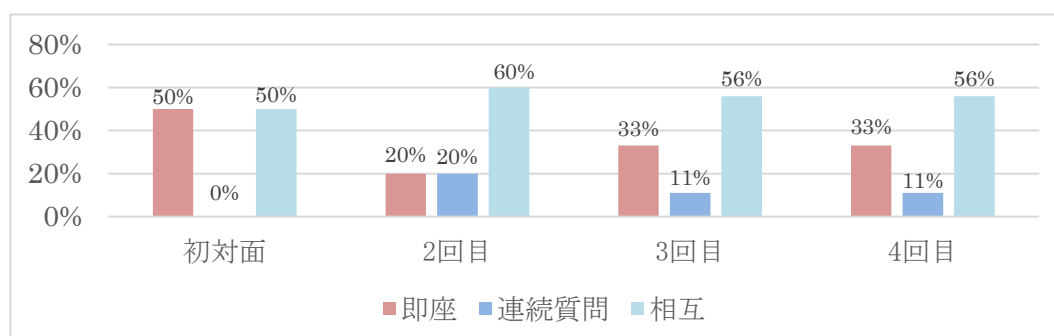


図7 日本語母語場面の話題導入プロセス<グループ1>

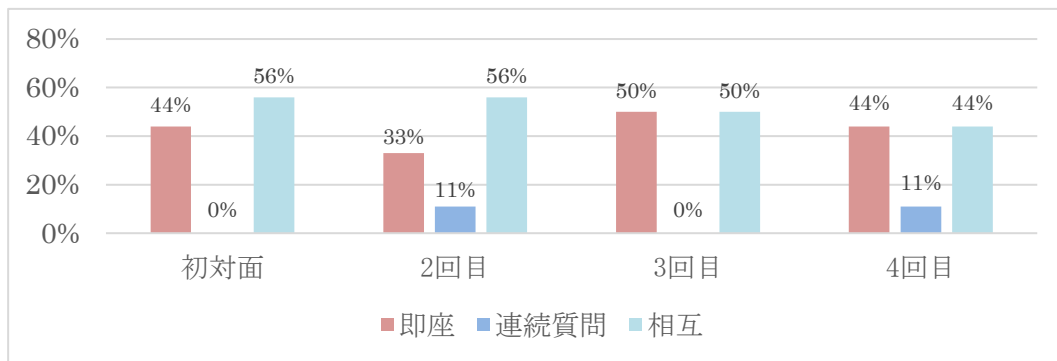


図 8 日本語母語場面の話題導入プロセス（グループ 2）

図 5、図 6、図 7、図 8 を比較すると、日本語母語場面より、日中接触場面の日本語会話における話題導入プロセスのパターンのほうが多様であることがわかる。

また、グループ 1 とグループ 2 の日中接触場面の初対面から 4 回目までの会話を全体的に見ると、それぞれの会話において、常に半分以上の割合を占めるパターンは見られない。一方、グループ 1 とグループ 2 の日本語母語場面では、接触回数にかかわらず、会話においては「相互型」の割合は常に 50%以上を占めている。ここから、日本語母語場面では接触回数が増加するにもかかわらず、相手に配慮しながら、相互に話題を導入していくという姿勢がうかがわれる。

V おわりに

本研究では、日中接触場面と日本語母語場面それぞれ 2 組の日本語会話のデータを用いて、話題が導入される際の話題導入プロセスのパターンの種類と接触回数の増加による話題導入プロセスの変化を分析し、両場面の比較を行った。以下、本研究のデータの範囲内において得られた結果をまとめる。

まず、話題導入プロセスのパターンに関して、日中接触場面に見られるパターンは多様であり、話題導入発話から話題確立まで様々な交渉を経ることが確認された。例えば、「混合型（確認連鎖＋連続質問）」、「候補話題の却下」、「一方通行の会話」の三つのパターンは日中接触場面のみに見られた。また、日中接触場面では、話題導入発話の内容が理解できない、あるいは聞き取れずに聞き返しが生じることが多いから、「確認連鎖挿入後の話題化」のパターンが日本語母語場面より頻繁に見られる。

次に、接触回数の増加による両場面における話題導入プロセスのパターンの変化に関して、初対面会話においては、主に相手に質問することで関係構築のきっかけを作るのに対して、4 回目の会話では、自ら自己開示を行いながら関係構築していく様子が両場面に共通して見られた。

また、接触回数にかかわらず、日中接触場面に見られる「相互型」の割合が比較的低い。これは、「相手の導入発話を受けて、即座にそれについて具体的に語り始める」（楊 2011, p. 196）という中国語母語話者の話題導入スタイルによる影響が考えられる。一方、日本語母語場面では、話題導入プロセスのパターンに偏りが見られ、接触回数にかかわらず、「相

互型」の割合が顕著に高い。つまり、会話の回数が増えても、「会話を過度にリードせず、相手の反応を見ながら、徐々に話題を開始していく」（楊 2011, p. 196）という配慮が働いていることも確認された。

本研究では、初対面からの継続会話における話題導入プロセスの相互行為について、新たな分析を行った。その結果は、現段階ではサンプル数の制約により、日中接触場面と日本語母語場面の会話の特徴として一般化することができないが、今後、日本語教育にも活かすことができる研究へと発展させるため、データ数を増やし、さらに分析を進めていく予定である。

（神戸大学国際文化学研究科博士後期課程）

【付記】

本研究は、筆者が 2022 年 2 月に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

参考文献

- 宇佐美まゆみ・嶺田明美（1995）「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン：初対面二者間の会話分析より」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』（2），pp. 130-145.
- 宇佐美まゆみ・野口英美・木林理恵（2014）「初対面二者間会話における話題導入と展開のプラクティス：対話相手との年齢差・性差に着目して」『言語・音声理解と対話処理研究会資料』（71），pp. 23-28.
- 大谷麻美（2019）「日本語初対面会話における話題導入の相互行為：プロセスと対人関係機能」『人文論叢』（67），pp. 1-27.
- 呉睨榮（2017）「話題展開に見られる自己開示：日本語母語話者と韓国人日本語学習者の初対面から 3 回の会話を通して」『言語学論叢 オンライン版』（10（通巻 36）），pp. 63-83.
- 方敏（2020）「初対面以降の会話における話題選択及び変化に関する一考察—日本人女子学生による初対面から 4 回目までの会話をもとに—」『ことば』（41），pp. 89-105.
- 三牧陽子（1999）「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー—大学生会話の分析」『日本語教育』（103），pp. 49-58.
- 楊虹（2005）「中日日中接触場面の話題転換—中国語母語話者に注目して—」『言語文化と日本語教育』（30），pp. 31-41.
- 楊虹（2011）「日中日本語母語場面の初対面会話における話題開始の比較：参加者間の相互行為に注目して」『立命館言語文化研究』（22-3），pp. 185-200.